

道博協ニュース

江別大会特集号

発行所 北海道博物館協会
事務局 〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館内
電話/011-898-0456・FAX/011-898-2657

第38回北海道博物館大会 7月1・2日江別市で開催

既に、会員の皆様には開催要項等をご案内いたしました。第38回北海道博物館大会及び平成11年度北海道博物館協会総会を、来る7月1・2日の両日、江別市において開催いたします。札幌圏での開催は、昭和54年の道立近代美術館で行った第18回以来の開催となりますが、大会・総会に向け地元の江別市・江別市教育委員会の全面的な協力を得て、着々とその準備を進めております。以下、あらためてその概要をお知らせいたします。

会期 平成11年7月1日(木)～2日(金)
会場 江別市民会館(江別市高砂町6番地)
TEL(011)-383-6446

大会テーマ 『地域産業と博物館』

大会日程 7月1日(木) —— 1日目 ——

- ①受付 9:30～10:00
- ②開会式・総会・特別報告・表彰式
10:00～12:00
- ③昼食 12:00～13:00
- ④特別講演 13:00～14:30

演題：『博物館とまちづくり—地域産業・文化史・情報発信—』、講師：北海道女子短期大学部教授 水野信太郎氏

⑤シンポジウム 14:30～16:50

テーマ：『地域産業と博物館』、司会：江別市教育委員会生涯学習担当参事 高橋正勝氏、報告1「自然・一次産業・観光を結ぶサケを中心とした博物館の役割」、標津サーモン科学館主任学芸員 小宮山英重氏、報告2「ブナセンターが地域産業?」、黒松内町ブナセンター学芸員、高橋興世氏、報告3「やきもの振興をテーマにした博物館」、江別市セラミックアートセンター事業推進係長 園部真幸氏、報告4「企業博物館のホスピタリティとイベント」、サッポロビール博物館館長 今堀忠国氏

⑥閉会式 16:50～17:00

⑦懇親会 18:00～20:00

7月2日(金) —— 2日目 ——

- ①視察見学受付 8:30～9:00
- ②市内施設等見学 9:00～12:15 江別市郷土資料館、町村牧場、江別市セラミックアートセンター、江別市ガラス工芸館、江別市屯田資料館、野幌駅前解散

＝大会開催地＝

江別市の紹介

江別市は、札幌の東隣りに位置する人口12万人の文教都市である。北部には北海道第一の河川石狩川が雄大な流れをみせ、流域には豊かな農耕地が広がっている。市街地の大半は、石狩川の川測から西南部の高台へと緩やかな台地状の地形を形成する野幌の丘陵上に広がり、札幌市との境界に

は、市域の約10%を占める野幌森林公園の豊かな森が残されている。北から江別へ流れ込んだ石狩川は野幌丘陵の先端部にぶつかり、流れを大きく北西へと変える。石狩川が日本海へ注ぎ込む石狩河口までは約25kmほどである。

江別付近では多くの支流が石狩川に合流する。当別の山並に源を発する篠津川、夕張山系からの夕張川、支笏湖と恵庭岳を源流とする千歳川、そして札幌市の中央部を貫流し石狩川へと合流する豊平川も、新水路ができるまでは野幌丘陵の北側



江別市郷土資料館

を大きく蛇行し、対雁付近で石狩川に流れ込んでいた。この豊平川のかつての流路は旧豊平川と呼ばれる小河川にわずかに名残をとどめている。豊平川(旧豊平川)と江別川(千歳川)が石狩川へ注ぎ込むあたりは、それぞれツイシカリ(対雁)、イヘツプト(江別太)と呼ばれ、松浦武四郎をはじめとする多くのエゾ地探検家がエゾ地の奥へ向かう折り通った処でもある。武四郎の日記には、ここにいくつかのアイヌの人々の集落があったことが残されている。

しかし、それよりはるか1万年以上の昔からこの河川はヒトの重要な交通路であったのである。縄文時代早期から擦文時代にいたるまで、約130カ所を超える遺跡が野幌丘陵上に確認されている。先史時代のヒトビトもまたこの河川を行き交い、営々とした営みを繰り返してきたのである。

江別市は21世紀に向け、この川と丘陵とそこに育まれた文化を原像とした「石狩川と原始林にいだかれたふれあいのまち」を目指している。

■江別市郷土資料館(緑町西1丁目38番地)

旧公民館を改築し平成3年4月開館。煉瓦を外壁に使った瀟々たる建物には、市内各遺跡から出土した考古資料を中心に屯田関係、生活資料など約1,300点を展示している。なかでも、2階へ上るとすぐに目に入る400個以上の土器の展示は圧巻である。さらに、市指定文化財の坊主山遺跡から出土した江別式土器、重要文化財「江別太遺跡の木製遺物」と「元江別1遺跡の墳墓からの出土品」、国指定史跡の「江別古墳群」の出土遺物など貴重な考古資料を展示している。

■江別市セラミックアートセンター(西野幌114番地)

平成6年11月開館。鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積4,100㎡の建物の内外壁には地元産の煉瓦約17万枚が使用され、野幌森林公園の豊かな緑と調和した建物である。

館内には、中国古陶磁器や釉薬研究の第一人者で、戦後江別市で北斗窯を営んだ小森忍(1889～



江別市セラミックアートセンター

1962)の足跡を紹介する「小森忍記念室」、北海道で活躍する陶芸家の作品を紹介する「北のやきもの一現窯」、赤煉瓦の歴史を辿る「れんが資料室」などの展示のほかに、特別展示室・陶芸工房・窯などの施設を備え、特別展、陶芸教室、ワークショップ等多彩な催しを開催している。

■江別市旧町村農場(いずみ野25番地)

平成8年10月開館。江別市を代表する景観の一つであり、長い間、市民から親しまれてきた町村農場が篠津へ移転するのに伴い、その景観を残そうと旧牛舎と居宅など建物を改修し、敷地を市民の憩いの場として保存している。

昭和3年、町村敬貴は石狩から対雁へ移り農場を開設した。牛舎内部は酪農関係の資料、居住には町村敬貴の遺品とともに町村農場の沿革をパネルを用い展示している。

■江別市屯田資料館(道有形文化財 野幌屯田兵第二中隊本部 野幌代々木町38番地)

野幌へ屯田兵が入地した前年、明治17年頃に建てられたと推定され、現存する最古の本部建物である。洋風2階建、建築面積150.72㎡(48坪)、桎葺(改修後は亜鉛鉄板)切り妻造の屋根、バルーンフレームと呼ばれる開拓使の建築に多く用いられたアメリカ風小屋組構造を用いている。

全面解体の修理工事を行い、可能な限り創建当時の形態に復原され、屯田兵関係の資料を展示し、平成6年に「屯田資料館」として開館した。

■江別市ガラス工芸館(野幌代々木町53番地)

「旧石田邸」として市民に親しまれていた煉瓦の建物を移築改修し、ガラス工芸館として平成6年開館した。昭和20年頃の建築と言われ、当時の煉瓦工場の役員であった石田惣喜知さんが自社の煉瓦を使い建てた。明治の洋館を想わせるユニークな設計の建物である。修復後は、ガラス工芸家米原眞司さんのガラス工芸工房として利用されて、2階の一部は作品の展示室となっている。

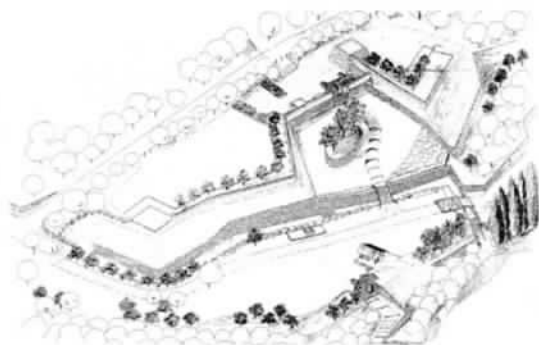
(江別市郷土資料館 館長 直井孝一)

史跡福山城の整備事業

福山（松前）城は慶長11（1606）年に築造した福山館を前身とし、北方警備のため安政元（1854）年に完成したわが国最後の旧式築城による城郭である。しかし、明治維新の激動期を経て、新政府の命により天守（三重櫓）と御殿の一部、御門を残し、明治8年までに建物は解体撤去され、土地は公共・一般用に解放された。現在では市立函館図書館に残る慶応3年撮影の写真によって、当時の面影を窺うことができるにすぎない。

城地は昭和10年に史跡に指定されたものの、戦中戦後にかけては荒廃がすすみ、ようやく昭和51年度から『史跡福山城保存管理計画』にしたがい、文化庁の補助事業により20ヶ年の計画で保存整備事業がすすめられた。事業は約11億円をかけ、公有建物の撤去移転・民有建物の移転と土地の買収、主な遺構の確認調査など、この20年間ではほとんどの建物の撤去がなされてきた。

平成8年度には更に20ヶ年を見越した新保存管理計画が策定され、現在その事業が進展中である。前述のように、それまでの事業が建物の移転や用



地の購入、遺構調査に主眼がおかれていたのに対し、今後の計画は調査と復元整備に重点がおかれることになる。手始めに平成11年度からは『ふるさと歴史の広場事業』の展開により、4年間で約5億円の予算により、二の丸・三の丸の一部約6千㎡の地域の復元整備を計画している。具体的には、外堀と木・石橋の復元、石垣と2ヶ所の城門と土塀の復元、全体模型の製作、植栽整備などである。

この事業は、今回の計画をもってしても完結はせず、おそらく今後数十年は要するだろう。将来的には総合博物館建設も話題となるだろうが、当分の間、松前城資料館は史跡福山城のガイダンス施設としての役割がますます大きくなるにちがいない。

（松前町教育委員会 久保 泰）

平成10年度遺跡発掘出土資料展

〈H11.4.24～5.30〉

恵庭市の市街地は市内を流れる中小河川によって形成された平地に広がります。現在、その河岸を中心に116ヶ所の遺跡が確認されており、昨年は緊急調査として旧カリンバ、ユカンボシ両河川沿に位置する4遺跡の発掘調査を実施しました。

この展示は、調査の結果、出土した資料をいち早く市民に紹介しようと企画されたものです。

特に宅地造成に伴う事業の一環として調査された旧カリンバ川河岸に位置するカリンバ2遺跡からは、道内でも最大級の大きさである縄文時代中期の両頭石槍、近世アイヌ期（16～17世紀）の土壙墓に納められていた白磁の小皿、ガラス玉、漆器、金属製品などの副葬品、また、一昨年引き続き約300年程度前の地震跡として確認された噴砂や、50軒余り発見された縄文時代の住居跡の写真など当時の様子を想像させる資料が見学者の注目を集めていました。

既に近世の地図にも表れる旧カリンバ川は明治29年、陸地測量部発行の地形図によると現在のJ



恵庭市カリンバ2遺跡第6地点出土遺物

R恵庭駅付近の黄金地区に源を発し、数本の支流を集め千歳市釜加地区で千歳川に合流していたようです。今では想像できないほど広い流域面積を持つ、水量の豊富な川であったことがうかがえます。

源流部に近いこの遺跡の一带は、現在も春になると雪解け水が加わってわずかに残る旧カリンバ川筋が忽然と現れ、一面にミズバショウが咲き乱れます。また、ガン・カモ類が羽を休める光景も見られ、数少ない「平地の自然」が残る場所としても知られています。300点余りの遺跡と1枚の地図から自然の恵み豊かな太古の恵庭の姿が偲べれます。

（恵庭市郷土資料館 学芸員 大林千春）

日胆地区の博物館近況報告

日高、胆振管内の博物館での動きをいくつか手短かに報告したい。

これまで、日高山脈の壮大な自然史ドラマは多くの人たちを魅了してきた。そんな日高山脈の自然史に着目したユニークな博物館、「日高山脈館」が6月26日、日高町にオープンする。建物は延べ面積510㎡。展示では日高山脈の生い立ちをメインテーマに、日高山脈の地質と氷河地形、鉱物、岩石、化石類、そして日高山脈の生き物、さらには登山史、登山関係資料と興味深い。

「新版えりもの植物」という本格的な植物図鑑が、えりも町教育委員会から発行された。初版本から18年を経ての改訂版である。発行までには、えりも町郷土資料館を拠点にした4年の歳月に渡る実行委員会メンバーの熱心な調査活動があった。メンバーを町内から募るといふ、いわゆる町民参加型で進められ、調査で得られた貴重なスライド、さく葉標本はすべて郷土資料館に收藏される予定。図鑑では最後に「貴重な自然遺跡は町民自らの手で守る」とあり印象的である。町民有志の意識の

高さ膨大な予算措置を決断した町関係者の意識の高さの両輪のなせる技か。

穂別町立博物館に長く勤務されていた地徳力さんが、多くの人に惜しまれながらこの春に退職された。これまでにいろいろな方面に幅広く活躍されていただけに大きな痛手である。しかし、穂別には明るい話題もいっぱい。町立博物館は昭和57年の開館以来、5月末で入館者数30万人達成、一方、隣の穂別町地球体験館は平成4年の開館以来35万人を目前にと喜びに沸いている。また、調査中であつたモササウルスの化石が新種であることがわかり、頭頂部骨、後頭部骨、上翼状骨、縁辺歯の4点が博物館に展示されている。

日胆地区博物館等連絡協議会では、日高、胆振管内の博物館スタンプラリーが5月1日からスタートし、翌年2月29日まで行う予定。これには、管内の博物館23館園が参加し、企画立案、ラリー冊子の発行、ポスターの発行、膨大な量の冊子の各館園宛への配布と、連日の強行スケジュールにもかかわらず、短期間のうちに実現できたのも、「それぞれに抱える多くの困難を乗り越え、一つ土俵で相撲をとろうじゃないか」との気持ちをもつての協力があつたればこそと考えるこのごろ。
(日胆地区博物館等連絡協議会 事務局長 吉田国吉)

道北地区博物館等連絡協議会

今年の巡回展は「道北・鉄道メモリアル」!

5月26・27日、第15回総会が上川管内美幌町で開催されました。会場は美深町文化会館(愛称COM100)で、28億円の巨費を投じて昨年オープンしたばかりの多目的複合施設でした。文化会館・公民館・図書館・郷土資料室などの機能を有する生涯学習センターで、町民が久しく待望していた施設とのことであります。

総会では第12回目の巡回展は人気上昇中のNHKの朝の連続ドラマ「すずらん」や映画「鉄道員(ぽっぽや)」に因んで「道北・鉄道メモリアル」(主管:留萌市海のふるさと館)に決定しました。道北の各鉄道路線の今昔を写真とパネルで表現する展示構成で、7月の留萌市海のふるさと館を皮切りに道北地区の博物館13館を巡回する予定であります。

研究討議では、「生涯学習における博物館・資料館の役割」をテーマに士別市立博物館の水田一彦学芸員の発表を基にして、各館の取り組みと課題などについて活発な論議がなされました。中で



も士別市の博物館ボランティアについて質疑が集中しました。市民に公募して登録を開始したが、応募者が少なく、十分な活用も図られていない現状が報告されました。また、名寄市北国博物館でも「サポーター」の呼称でボランティアを呼びかけているが、市民の関心が低調で期待していた成果が得られていないとのことであります。

研究討議終了、宿泊する「びふか温泉」に会場を移動して懇親会を行ない、各館相互の情報の交流が図られました。翌日は美深町文化会館の施設を見学して解散となりました。

(富良野市郷土館 係長 杉浦重信)

端野町における カタクリ調査について

「石北峠以東には、カタクリが植生していない。」というのが、この地方の植物研究家の間でのほぼ定説となっていました。端野町に植生しているというのは、町内のごく一部の限られた愛好者には知られていましたが、盗掘などを恐れて公表はされていませんでした。

当館が調査を行うとともに保護方策を講じる必要があるとの判断に立ち、平成2年から調査を開始しました。調査に当たっては、専修大学北海道短期大学造園林学科の依教授、石川教授、本多講師などの協力・指導をいただいています。

北海道内での分布については、文献によるものほか他市町村へのアンケート調査を行いました。その結果、道東でのカタクリの分布は皆無とはいえませんが、ほとんど分布しておらず、あったとしても消滅あるいは消滅に近い市町村がほとんどとなり、端野町のカタクリが分布の限界に近いということがほぼ明らかになりました。これは平成9年に実施された「北海道フラワーソン'97」

の調査結果においても保管される形となりました。端野町内における調査としては、今後の消息を占うための個体群動態調査、生育環境調査、笹刈りを実施した個所との比較調査、受粉調査などを行っています。

一番問題なのは、この地方ではカタクリが珍しいことから、盗掘の恐れがあるということです。また調査区が春の山菜の時期と重なるため、調査区が破壊されるという懸念もあります。分布の限界に近いということから、わずかなダメージによって消滅してしまう危険性もあります。また、すべてが民有林で細かく分かれ、群落もその中に点在しているため、保全の方策にも苦慮しているのが現状です。

以上の点から、これまではあまり公表しないで調査を進めてきましたが、保護のためにはまず町民の理解を得ることが重要であることから、今後は公表しつつ町民の協力の下に保護できるような方策を進めていかなければならないと考えています。

人間と長い間共生してきたカタクリです。ほかの野草や動物、森林など自然環境全体を残し、これからも共にいい関係でいきたいものです。

(端野町立歴史民俗資料館 学芸員 大橋秀規)

体験教室「のどうたを歌おう」

「のどうた」はアルタイ山脈周辺のアジア中央部で古くから歌いつがれている歌唱文化であり、西モンゴルの「ホーミー」、トゥバ共和国の「ホーメイ」、ハカス共和国の「ハイ」などが知られている。

歌唱法は倍音唱法ともよばれ、自らの地声の中に含まれている普段は意識されていない2倍、4倍の「倍音」を意識的に増幅し、倍音部分でメロディーを奏でてゆくものである。

と書くとなんのことだかさっぱりわからないかもしれないが、一度くらいはテレビで見たことがあるのではないだろうか？一見お経か、浪花節のように「ヴイイイイイー」という声で歌っているのを。

じつはちゃんと倍音が出せる（聴ける）ようになると、まるでホイッスルのような、あるいは焼芋屋さんの汽笛？の音のような「ピーー」というきれいな音が聞こえるのだ。

以前から興味もあったが、コンサートを聴いてますます練習し、自分の口から二つの音が同時に

出ていて、倍音だけで音程がつけられると何とも気持ちがいい、というところまで入れ込んだ。

同僚の内田学芸員と相談して、「民族文化」というくくりで体験教室を開催してしまった。

まず、倍音はだれもが出しており、その混じり具合が声の個性だという。また、同じ音程なのになぜ五十音が別に聞こえるかということ、舌や唇などの働きで倍音の混じり方をコントロールできているからだという。

また、倍音を出す、だけではなく「聴ける」ことも重要で、自分の気が付かない自分の能力を発見する、という意味もある。

国によってのどうたの使われ方や歌の内容はさまざまな傾向があり、恋のうたが多いところ、逆に英雄や王をたたえるようなもの、宴会のうたが多いところなどという具合だ。

馬頭琴（モリン・ホール）という馬の尾を約100本づつ束ねた2本弦をこれまた馬の尾の弓で弾く楽器を弾きながら歌うことが多いのだが、自分でやってみるとびっくりするほど大きな倍音でた。馬頭琴の音が地声を打ち消すかららしいのだが、神秘的でさえある経験だった。

次回は馬頭琴の体験教室かな？と思った。

(帯広百年記念館 学芸員 池田亨嘉)

館園紹介

江別市屯田資料館

(北海道有形文化財 野幌屯田兵第二中隊本部)

北海道の開拓に大きな足跡を残した屯田兵は、明治8年(1878)、札幌の琴似に入地したのが、その始まりである。その後、開拓使は当時の米国人顧問の提言を入れ、江戸の足軽長屋と酷評された兵屋を暖炉、ガラス窓のついた米国式住宅に改め、家畜用の畜舎も付随させた一戸約1万坪の大農場経営の屯田兵村を計画した。その試みとして江別太(江別)に屯田兵10戸を入地させたのが、江別最初の屯田兵である。しかしながら、この江別太試験屯田の成績は思わしくなく、兵屋に費用がかさむことから、明治14年(1881)、篠津にロシア式丸太小屋の兵屋を試みた以降は、従来の和式の兵屋に変更され、給与地も4千~5千坪となった。

その後、江別市へは明治17年から19年にかけて、江別、篠津、そして新たに野幌に入地することになる。

野幌の屯田兵は、明治18年(1885)と同19年の二次にわたり江別兵村との境の6丁目から10丁目にかけて225戸を入地した。当初、野幌兵村は江別兵村と同様、琴似に本部を置く第一大隊に所属(第一大隊第四中隊)していたが、明治20年(1887)に江別・篠津兵村を第三大隊第一中隊、野幌兵村を同第二中隊に再編成し、江別に大隊本部を置いた。

野幌の第二中退本部の建物は、屯田兵の入地の前年、明治17年(1884)の建築と推定され、野幌兵村のほぼ中央、練兵場(現第二中学校敷地)の向かい、二番通りに面して建てられた(現錦山天満宮鳥居あたり)、建築面積150.72㎡、延べ床面積260.03㎡の洋風二階建てである。一階には中隊長室、下士官室、事務室、医務室などを配し、階

上は兵器、演習材料等の格納庫に充てられていた。

桁葎(現在は亜鉛鉄板葎)、急勾配の切妻造りの屋根をもち、正面入口には切妻造りのポーチが付く。建物の正面左側のガラス戸の連双窓を使用するなど一部に独自の様式も見られるが、上げ下げ窓と下見板張りの外壁、バルーンフレームと呼ばれる小屋組構造など、開拓使以来の米国風の建築手法を色濃く残している。

明治37年(1904)の屯田兵条例の廃止後、建物は地域の集会所などに利用され、大正2年(1913)に8丁目通りに面した江別第二小学校側に移され、農業振興会事務所や教室等にも利用された。

昭和33年(1958)、北海道有形文化財に指定されている。

近年、建物の傷みが著しく、抜本的な保護処置が必要となったことから、平成6年(1994)より、保存のための全面修復工事を実施し、同時に建物を二番通りに面した創建時の位置に近づけ、現在の場所に移築復原した。建物の内外観は創建時の形から大幅に変わっていたため、全面解体調査を実施し、可能な限り創建時の形態に修復した。

修復後は、江別市郷土資料館の分館「江別市屯田資料館」として屯田兵屋の模型や江別・篠津・野幌の兵村のジオラマなどを展示し、内部を一般に公開している。

江別市内には、このほかに屯田兵関係の遺構として、湯川公園内に屯田兵屋、中隊本部の敷地内に被服庫、萩ヶ岡に煉瓦造の火薬庫が残されている。

火薬庫は、江別に大隊本部が置かれた明治19年(1934)頃の建築と推定され、明治期の数少ない煉瓦造建築物である。昭和46年(1971)、江別市指定文化財に指定されている。

煉瓦造平屋建て、建築面積約4.5坪の小さな建物である。使用された煉瓦に丸にS字の刻印が見られることから、札幌市白石の鈴木煉瓦工場製と考えられている。



野幌屯田兵第二中隊本部(木造二階造)



火薬庫(煉瓦造)

館・園の主な展覧会と普及事業

(7月～10月)

石狩

- 江別市セラミックアートセンター (011-385-1004)
7.24～25 「親子陶芸体験」
8.26～9.15 「陶&くらしのデザイン展」
- 札幌芸術の森 (011-582-5111)
8.10～13 版画講習会「親子陶芸体験」
10.28～29 「凹版(木版を使って)」
- 札幌市青少年科学館 (011-892-5001)
7.28～29 「夏休み自由研究教室」、8.7 プラ
ネタリウム夜間特別投影「星空へのいざない」
- 札幌市豊平川さけ科学館 (011-582-7555)
7月「豊平川さかなウォッチング」
10月「豊平川サーモン・ウォッチング」
- サッポロビール博物館 (011-731-4368)
7.4 「ビア フェスティバル」
8.1～10 「セタウィーク」
- 札幌市円山動物園 (011-621-1426)
7月下旬「一日飼育係」
8月上旬「親子夜の動物ウォッチング」
- 北海道開拓記念館 (011-898-0456)
7.24～8.29 テーマ展「Fhoつtoする博物館資料」
7.14～8.29 体験学習行事「カメラのふしぎ」
- 北海道開拓の村 (011-898-2692)
7.11 「いろいろっこの会」
9.19 「秋のふるさとまつり」
- 北海道立三岸好太郎美術館 (011-644-8901)
7.29～8.26 所蔵品展「生きた・描いた・愛し
たー夭折の画家の生涯ー」
10.2～ 特別展「三岸好太郎・三岸節子展」
- 千歳サケのふるさと館 (0123-42-3001)
7.17～8.31 夏休み企画展「北海道の国立公園展」

渡島

- 戸井町郷土館 (0138-82-2273)
8月「縄文の道探検ー縄文式土器づくり体験教室ー」
- 市立函館博物館 (0138-23-5480)
8.3～9.26 特別展「戊辰戦争ー鳥羽伏見から
箱館までー」、～8.22 企画展「岡本一平展」
- 北海道立函館美術館 (0138-56-6311)
7.24～9.12 特別展「エコール・ド・パリの異
オバスキ展」
- 函館市北方民族資料館 (0138-22-4128)
7.27 夏休み自由研究「北方民族の切り紙細工
をしよう」、9.25 「アイヌ刺しゅう教室」

松山

- 江差追分会館 (01395-2-0920)
8.9～11 「追分唄と郷土芸能の実演」
- 熊石町歴史記念館 (01398-2-2200)
9月中旬「道南工芸作品展」

後志

- 有島記念館 (0136-44-3245)
9.8～21 「天野純男墨絵展」
- 小樽市青少年科学館 (0134-22-0031)
7.24～8.18 特別展「デジタルテーマパーク」
- 小樽市博物館 (0134-33-2439)
7.24 講座「昆虫標本の作り方」
9.12 「秋の植物野外観察会」
- (株)小樽水族館公社 (0134-33-1400)
夏休み期間中「第3回水族館探検隊」、「水族館裏
方見学ツアー」

空知

- 砂川市郷土資料室 (0125-52-2339)
8.1～30 特別展「隠し武具展」
- 滝川市美術自然史館 (0125-23-0502)
7.31～9.26 特別展「北海道美術の青春期」
- 三笠市博物館 (01267-6-7545)
9月 自然観察講座「キノコの観察」

上川

- 旭川市博物館 (0166-69-2000)
8.22 講演会「大雪山と小泉秀雄」
9.4～10.3 企画展「四季をめぐってーアイヌ
文化にみる自然利用ー」
- (財)旭川市兵村記念館 (0166-36-2323)
～8.17 歴史展「屯田兵の心と声ー屯田開拓資
料展ー」
- 下川町ふるさと交流館 (01655-4-2627)
10月 自然体験学習会「ドングリクッキーを作ろう」
- 中川町郷土資料館 (01656-7-2419)
7～9月「地層観察教室」
- 富良野市郷土館 (0167-22-3864)
7.18 富良野の自然に親しむ集い「ホテルと星
座」

留萌

- 金田心象書道美術館 (01632-5-2720)
10.1～11 「第9回心象書道展」

網走

- 美幌博物館 (01527-2-2160)
7.11～8.15 企画展「コウモリ展」
7.31～8.1 「コウモリフェスティバル in 美幌」
- 北海道立北方民族博物館 (0152-45-3888)
7.20～9.26 第14回特別展「神の魚・サケー北

方民族と日本一」

9. 4 講演会「サケをめぐる文化」

胆振

●苦小牧市科学センター (0144-33-9158)

8. 4～5 夏休み親子科学教室「ピンホールカメラを作ろう」

●苦小牧市博物館 (0144-35-2550)

8. 21 講座「地層に刻まれた太古の海の記録」

9. 19 観察会「地層観察会」

●室蘭市青少年科学館 (0143-22-1058)

7月下旬～8月上旬「夏休み科学クラブ」

9月「秋の盆栽教室」

日高

●静内町郷土館 (01464-2-0304)

8～9月 特別展「量る・測る・計る」

●新冠町郷土資料館 (01464-7-2694)

8. 10～14「昆虫標本教室」

9. 11「化石を見つけよう」

十勝

●帯広百年記念館 (0155-24-5352)

9. 14～10. 17 特別企画展「ひと・ヒト・人が歩いた時間」

9. 25 講演会「北海道考古学のいま・むかし」

●神田日勝記念館 (01566-6-1555)

8. 10～17 絵画展「ホシバ リュウミツ展」

10. 5～11 児童生徒絵画展「馬の絵作品展」

●本別町歴史民俗資料館 (01562-2-2141)

7月下旬「資料館まつり」

8月上旬「チョウの標本づくり」

●幕別町ふるさと館 (0155-56-3117)

8. 8「ふるさと館まつり」

●足寄動物化石博物館 (01562-5-9100)

8月上旬「'99化石サマーキャンプ」

9月「図画工作コンクール」

釧路

●釧路市立博物館 (0154-41-5809)

8. 10～31 パネル展「おさかなセミナーくしろ」

●北海道立釧路芸術館 (0154-41-5809)

9. 3～10. 17 特別展「アンセル・アダムスの世界」

根室

●標茶町ポー川史跡自然公園 (01538-2-3674)

7. 15～8. 13「ポー川公園サマー教室」

10月「土器づくり体験教室」

●別海町郷土資料館 (01537-5-0802)

10月「バードテーブル作り教室」、「歴史散歩ー郷土ふるさと巡りー」

事務局日誌 (平成11年4月1日～6月15日)

- 4月1日 事務局業務に対する協力依頼文提出 (北海道開拓記念館宛)
- 4月9日 平成10年度教育関係大会開催事業補助金支払通知書受領
- 4月20日 平成11年度事務局業務分担決定
- 4月21日 道教育長へ意見・要望書提出
- 4月27日 道教育長との意見交換会 (吉田会長、安藤、佐藤、長尾各副会長ほか出席)
- 道博協ニュース 第66号原稿依頼
- 5月8日 平成11年度臨時役員会案内送付
- 5月14日 第38回大会共催、後援等依頼文送付
- 5月15日 第38回大会要項会員送付
- 5月20日 平成11年度第1回役員会開催案内
- 5月21日 臨時役員会開催 (北海道立近代美術館)
- 5月18～21日 臨時職員橋場葉子さん雇用
- 5月25日 平成11年度協会役員候補推進につき各地区連絡協議会長に依頼
- 平成11年度道博協負担金納入の依頼
- 5月26日 道協協会員加入促進の依頼文送付
- 平成11年度教育関係大会開催事業補助金交付申請
- 5月27日 平成11年度協会表彰者決定通知
- 6月1～2日 平成12年度道博協大会依頼、10年度会計監査のため山田事務局長、平川次長出張 (端野町、北見市、滝川市)
- 6月4日 賛助会員(株)日本工房退会
- 6月8日 賛助会員(株)トリアド工房退会
- 第38回道博協実行委員会開催案内
- 6月9日 第38回北海道博物館大会事務局会議
- 団体会員 ベテルブルグ美術館退会

役員異動

新年度の人事異動等により、次のとおり役員の変更がありました。

副会長 河村 猛 将氏

(北海道立近代美術館副館長 安藤孝次郎氏後任)

理事 矢吹 俊 男氏

(学芸職員部会員副会長 地徳 力氏後任)

大島 隆 氏

(北海道開拓の村常務理事 中村 齋氏後任)

平成11年度事務局体制

事務局長 山田 健、事務局次長 平川善祥

事務局員 舟山直治、右代啓視、三浦泰之

会費納入のお願い

本協会の円滑な運営のため、平成11年度会費納入をお願いします。団体会員15,000円、個人会員3,000円、賛助会員20,000円